



三 成長2

桜の花が満開の頃、あたしは小学校に入学した。写真には、黄色い帽子をかぶり、青い制服と白い靴を履いたあたしが背中にランドセルを背負って桜の木の下で立っている。

あたしが生まれるずっと前は、毎年、その時季の気温などの影響で、桜の花が散ってしまったり、反対に、三分咲きだったり、必ずしも、入学式の日には満開にならないことが多かったそう。いや、満開になることの方が少なかったらしい。

それだけに、桜の満開と入学式が重なると、記憶に鮮明に残るのだった。桜が満開だと、その後の人生が永遠に祝福に満ちたものになると信じることができた、

だが、今は、技術が高度に発達し、自然環境さえも操作することができるようになり、入学式などのお祝い事の時には、必ず、桜の花や梅の花、ひまわりの花、菊の花などが満開になった。だから、あたしの一つ上の学年の淳子ちゃんの時も、二つ上の学年の百恵ちゃんの時も、三つ上の昌子ちゃん時の入学式も、いつも満開の桜をバックにした記念撮影の写真となっている。その写真は、マンションのロビーに所狭しと飾られている。これは、公平・公正な大原則のもとで、世代を超えて、差別や区別がないように配慮している、ということらしい。

確かに、自分の時の入学式の時に、桜が散って、葉桜だったり、裸の枝のまま、つぼみだけだったりするのは、悲しい気がする。でも、淳子ちゃんや百恵ちゃん、昌子ちゃんの記念写真を見ると、背景は全く同じなので、写真に写っている顔を変えたら、全く同じになるのも、なんだか変だ。あたしたちはいつでも挿げ替えられる人形のような気がしてならない。あたしたちは代替可能な子どもたちなんだ。

そんなあたしの気持ちを察してか、ママがアームを曲げ、指の形をした棒を、体の前に縦に一本立てた。それは、黙っておきなさい。決して口には出してはいけません。「しっ」という合図なのだ。

あたしはその姿を見て黙った。自己規制をかけた。あたしが口に出すことで、ママに被害が生じないようにするためだ。あたしたち子どもたちが社会に適合しないような言動をした場合、最初に、とがめられるのはママたち、子育てドローンなのだ。

この街には、建物だけではなく、道路など、至る所に監視カメラと收音機が設置されている。また、各地区の派出所には、警察ドローンが配置されており、そのドローンは、あたしたちの通学時間には、必ず、交差点で、車などからあたしたちを守ってくれるとともに、密かに、監視力

メラと收音機から、社会不適合分子の子どもの発見に努めるとともに、その子が見つかれば、その子どもを育てているドローンに指導と威嚇をするのだった。

それでも、適切に子どもを育てられない子育てドローンは、不良品と見做され、知らない間にスクラップにされてしまう。その代わりに、新たな子育てドローン、別名継母ドローンが、その子どものもとに配置される。継母ドローンはその子どもの成長記録をビッグデータ通じて引き継がれるため、何の障害もなく、引き続き、子育てに専念できた。あたしたち子どもも記憶を書き換えられるために、何の問題もなく、新しい継母ドローンをママと呼ぶようになる。

どうしても、子どもが社会不適合な性格が修正できない場合は、その子どもは処分される。それが、何回の注意で、処分されるのかはわからない。ただ、あたしの記憶では、警察ドローンの胸に黄色いカードや赤いカードをちらっと見たことがあった。その子どもがいなくなっても、あたしたちも、子育てドローンたちも、その子どもの記憶は消されてしまうため、いなくなった子どもが存在したことさえも忘れてしまうのだ。

もちろん、こうした事実は後から知ったことではあるけれど、当時から、言葉にはできないけれど奇妙な違和感があった。そう、今から思うと、あたしは幼いながらに、他の子どもたちに比べて、知りたいという欲求が強くて、しかも、少し知りすぎたのかもしれない。そして、今がある。

奈保子が小学生になった。生まれてから6年間、よく育ったものだ。早いようで、長かった。短いようで、早かった。彼女の入学式を見ると、感慨深いものがある。人間の親も同じなのか。いや、この感情もあたしに植え付けられたものなのだ。そうでないと、子育てなんて、やってられないのかもしれない。自分の存在確認のために、次の世代を育てているのだ。とにかく、この先も彼女を育てていかなければならない。それが、私の使命だ。

順調だ。この時期に生まれた子供たちを見守っている私たちとしては正直、ほっとしている。子育てドローンたちからは子どもたちの成長の様子を情報で収集しているとともに、上には、常に、問題なく育っていることを報告している。だが、今は、まだ序盤だ。これから彼女たちは残り平均で七十年以上も生きていく。その間も、私たちは、彼女たちをフォローし、正しい道へと導いていかなければならない。彼女たちも、次の世代の彼女たちも。